平成25年(2013)
阿づまの光
1月号・Januaro

題字出口直日
通巻第526号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL(IP) 050-5510-9502
03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

道のため御国のために真心を
つくすは人のつとめとぞ思ふ

出口王仁三郎聖師

五代教主作 引出黒茶盌
［元屋敷土・鉱泉鉄釉（金字松釉仕立て）］

作品展から神の門戸へご案内

東京宣教センター長　浅田秋彦

いよいよ東京お作品展が間近に迫ってまりました。この東京お作品展は開教百二十年記念事業の一環として開催されます。その意義は関東教区の首都圏宣教の先駆けのご用であると同時に、全国地方機関の宣教活動の型としての使命があります。かつて四代教主さまは『関東が栄えないと日本が、世界が良くならない』と示されました。

来年の一月に開催されます「東京作品展」は準備を着々と進めているところであります。続いて同年三月、神奈川主会主催による「鎌倉作品展」が開催されます。その後にも関東教区各主会が「作品展」を順次に開催されるよう期待しているところであります。

ここで大切なことは、作品展の開催だけで宣教活動を終わるのでなく、大本公開講座や生きがい講座など、外に広くみ教えを伝えること、また信仰の喜びを家庭の内に深くお伝えるなど、お世話活動を通して、一般の人々を神の門戸までご案内することが、今求められている芸術宣教活動であります。

奇しくも、東京作品展の初日一月六日は、ＮＨＫ「Ｅテレ特集」で大本の〝出口なお・王仁三郎〟が紹介されます。それによって、大本の知名度はかなり高まり、大本を訪ねてくる方も多くなるのではないかと思います。

その受入れ側として、信徒一人ひとりがみ教えの実践リーダーになり、信徒自身が身魂磨きに精励していることが望まれるのではないでしょうか。

神諭に『一人なりと早くみろくの世の教えに基づかんと、大変困ることが差し来たりて居るから、末法のやり方してをりたら、ビクとも出来んようになりてくるから一人でも熱心な信者の人は、知らん人民に言い聞かして下されよ』とのお言葉は身に沁みて感じております。

開教百二十一年は、私たちが「みろくの世への実践」に努めさせて頂きたいと思います。

「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」より

人は何のために生きるのか
―人生にとって大切なもの―

講師 森 良秀（もり よしひで）
（東京宣教センター次長）

人の心がおかしい

最近、連日のように悲しい事件、とりわけ殺人事件のニュースが流れています。

脳医学の権威者で元京都大学総長の岡本道雄さんが「この世の中の様子は、おかしくなっている。おかしな世の中で治さなければならないのは、人の心である」と、生前こんな一文を残されています。

また、遺伝子研究の第一人者である、村上和雄さんは「今、一番大きな問題は、紛争とかテロ、あるいは環境破壊でもなく人々の心が病んでいる。この心の病を癒すことだ」として、その解決のための切り札が「神への祈り」だと、科学者が語る時代になりました。

人生の目的

万物は目的のために存在します。例えばここにコップがあります。このコップは水を入れて飲む、という役割があります。

コップ自身は何のために作られているのかわかりませんが、作った人間にはわかります。

人も何のために生まれてきたのかと考えた時、自分を生んでくれた親に尋ねます。でも親に聞いたからと言って、本当の目的は分からないです。確かに、子供が生まれて来る過程の中で、両親は欠くことの出来ない道具です。両親の親に尋ねても真実は分かりません。勿論生まれてきた本人は、尚更わかりません。

このように考えてきた時、自分を生んでくれたのは、果たしてだれなのか。人の力以外の存在を考えずにはおれなくなります。

また、生まれてきてこの世に生存するということも、自分の力だけでは不可能です。

火、水、土、空気などは、人間が作ったものではありません。人間がこの地上で暮らせるように、神さまが準備してくださったものです。

これらの恵みをいただいているのが人間です。これらの存在がなければ、地上に一秒たりとも生き続けることはできません。

そして、人間はいずれ死にます。死にたくなくても、時期が来たら死ぬ。死ぬことも実は人間が自由に出来るものではありません。「誕生」「生存」そして「死」、すべてが神さまの御手に委ねられています。

私たちは造物主、つまり神さまによって、作られた存在であるということを、謙虚に受け入れることが大事です。

大本教旨

神と人の関係を表したものが『大本教旨』です。

『神は万物普遍の霊にして、人は天地経綸の主体なり、神人合一してここに無限の権力を発揮する』

この教旨は、三段に分かれています。第一段は神について、第二段は人について示されています。そして第三段は神と人の関係について説かれています。

万物普遍の霊とは、この世を造った元の神が、万物に普遍の霊を与えているという意味が隠されています。

天地経綸の天地とは、私たちの住んでいる現界と、死んでから行く霊界の二界を指しています。

明治天皇が宣布された五箇条の誓文の中に「上下心を一にして盛んに経綸を行うべし」との条文があります。この経綸は国家を治め整える意味です。

「天地経綸」ですから、現界と霊界の両界を治め、整えていくという大望な働きが下されており、大本教旨の人間観は真に雄大です。

そのことを成就するためには、神と人が合一して力を発揮しないといけないと説かれています。

『神人合一』について例を挙げてみますと、老舗の主人と番頭の関係が、神と人との関係に似たところがあります。

番頭は任されたお店を、一生懸命働いて売上を伸ばし、みなさんに重宝がられるように頑張ります。良い結果が出たら、〝ひとえに店の信用と主人の徳のおかげだ〟と受け取る。逆に、商売がうまくいかなければ、〝自分の努力不足だ、もっと頑張らなければ！〟と心を改める。

ここで気をつけておかなくてはいけないのは、商売が繁盛した時に番頭が〝自分の力でここまでできた〟という慢心です。この勘違い、思い違いを戒めないと、つまずきの原因を作ります。

両者のバランスが取れていれば、うまくいくのは、神さまと人の世界も同じです。

大本教典である『大本神諭』には『神と人民と心が一つにならねば、この世はいつまでもおさまらんぞよ。神ありての人民、人民ありての神であるぞよ』とあります。

神にいくら力があっても、人に努力がなければ、この世の中は絶対に良くなりません。私たちは、神の徳を豊かに受けて、真の最善を尽くす、これ以外にはないのです。

人は神さまの子

『父母はからたまの親主の神はわがたまの緒の命の親なり』という王仁三郎の道歌があります。肉体の親は両親ですが、魂の親は生命の根源、すなわち神さまであるということを、確りと自覚して頂きたいと思います。

神の子である人間は、神さまの特性を受け継いでいますから、その特質、特性を磨いて、親なる神に代わって働く、これが現界における人間の使命です。

人間と他の生物との違いは、高等な霊性を持っていることです。人間以外の全ての被造物を支配する権能が、神さまから与えられています。天地を経綸していくために、人間は神さまから絶対的な条件を与えてもらっているのです。

善悪観

『あめ地の神の御業に奉仕して善事をなすは人の本分』これも王仁三郎の道歌ですが、先程申し上げましたように、現界、霊界を

含めて、これを天地と言います。顕幽両界を治め整えて、より良くしていくというのが人間の使命です。

『神の御業』とは、天国を建設する神業のことです。天国を一言で申し上げると、すべてが善意に見える所です。ここには、嫉み、恨み、不平不満、そういうものが一切ありません。

『善事をなす』場合の善悪の基準ですが、たいへん大事なところです。

確かに、今の時代では良いと言われていても、先になると悪いことになってしまうこともあります。これは歴史を振り返るとよくわかります。

大本は、絶対の善も絶対の悪もない善悪不二にして正邪一如の教えです。そういう基準の中にあって、善悪は、周囲に現れてきます。

そのような中で、〝天下公共のために尽くすことが善であり、一人の利益のために成すことを悪という〟。これは大変わかりやすいと思います。「世のため人のため」と日本人は昔から言ってきましたが、これがまさに「善事」なのです。

運命の開拓

人は時々「運命だから仕方がない」と言って、物事をあきらめる理由にしますが、運命にも種類があります。

例えば、男に生まれたこと、この時代に生まれたこと、日本の国に生まれたことなどは、神さまから与えられた絶対的な運命であって変えることはできません。

一方、人間が開拓できる運命があります。これを相対的運命と言います。

運命は天から降ってくるわけではありません。絶対的な運命は神さまからのものですが、相対的な運命は、いくらでも自分で作り、開拓できるのです。

開拓するために重要なことは心です。物事を行動に移すには、心で思わなければ、形になりません。その心とは「一霊四魂」です。

一霊四魂と五情の戒律

一霊とは、直日の霊魂のことです。もっとも純粋で高級な霊で、ことの善悪を直感する力、省みる力、いわゆる良心です。

そして、四魂というのは、荒魂、和魂、幸魂、奇魂です。

漢字は象形文字からも出来ていますが、心という字の画数は四画です。つまり、この四魂が顕現したものが、心だともいわれています。

四魂は、それぞれ独立して働いているわけではありません。一つの魂の中で、荒魂がよく働く人もあれば、奇魂が盛んに活動する人もあります。それがその人の性格として出てくるのです。

荒魂の本体は、勇です。物事を積極的に進めて行く、果敢に突進していく働きがあります。克己し、前向きに努力していると共に、忍耐力という強い気持ちを内に秘めています。

和魂の本体は、親です。周りと親しくして、和を高めていきます。自分自身を修め、家を斉え、さらに国を治めるなど、広く交流していく働きです。

幸魂の本体は、愛です。愛の働きは、世のため人のために利益になることです。またモノを育む働きです。植物や動物を可愛がるのも、この幸魂から生まれた働きです。

奇魂の本体は、智です。この智は、物事を為すのに手際がよく、感性が豊かで、悟りが速いです。

一霊四魂の働きの中で、省みる、恥る、悔いる、畏る、覚る、これを五情の戒律といいます。人の霊魂の中に備わっている最も高級な働きです。

一霊は、省みる働きです。

荒魂は〝恥る〟。この恥を知るというのは、人間だけの尊い働きです。特に日本は恥の文化と言われています。

和魂は〝悔ゆる〟。間違ったことを率直に認め、悔い改めるという働きです。最近は、自分が過ちを犯しているのにもかかわらずに、相手が悪いと平気で言う人もいます。これは和魂の働きが、全く機能不全です。

幸魂は〝畏る〟です。目に見えないものに対しても、敬虔な気持ちを持ち、自分を律して行くという働きです。

奇魂は〝覚る〟です。さまざまな経験をして、その折々に反省して、覚っていく。人間死ぬまで勉強とも言われますが、為し、省み、覚ることによって自分自身の魂が肥えていく、それが奇魂の働きです。

「言心行」という言葉があります。一霊四魂（心）が善悪、正邪を立て分けて、五情の働きが顕現された時に、おのずと「言」と「行」の働きは強まります。

このこと以外に、自分自身の開拓方法はありません。

例を挙げてみましょう。ここに一軒のパン屋さんがあります。朝早く起きて、店の周りの道路を掃き清め、お客さんを待つことが大切であることは、分かっています。しかし、眠たくて、起きるのが面倒くさいと思っているうちに、お客さんは自分の店の前を通り過ぎて、近所の別のパン屋さんで、買い物を済ませています。

お客さんや他の店を恨んでも、仕方がありません。自分が朝起きるという、荒魂が働かなかったことが原因です。

一方、〝朝起きて、店の前掃き清めて、お客さんを待とう〟という奇魂は働いています。毎日十人のお客さんを失うと、年間何千人という数を失うことになります。

運命は天から降ってはきません。自分の心の持ち方が運命を変えます。開拓は無限にできると、王仁三郎は説いています。

人間の自由意思

人間は他の動物より高級であるが故に、複雑で自律的で、自由の幅が極めて広いです。それは神さまに代わって、天地経綸の責任を与えられた大事な条件です。

自由というものは、善にも適用でき悪にも適用できます。自律的に善を行うということは、悪も自由に行うことができるということです。神さまは当然、悪を勧めてはいらっしゃいません。その時に最善と思うことをすれば良いのです。これは、自由意思を発揮する時の心得です。

人生の目的のために今成すべき大切なことがあります。一つ目が、一霊四魂を磨くこと。二つ目は、神徳を豊かに受けられるように努めること。そして三つ目は、自己の運命をどんどん開拓していくこと。四つ目が、地上に天国を建設する神業に参加すること。

地上天国を一つの柱時計に例えると、私たちは歯車か、小さなネジに過ぎないかもしれません。しかし、どれか一つが欠けても正しい時刻が刻めないように、私たちの誰か一人が欠けても、素晴らしい天国は築くことはできません。このことを人生の本分として、しっかりと受け止めていただきたいと思います。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は十二月九日、午前十時三十分から、斎主・成尾義愛善宣教課主幹のもと執行され、三百四十一人が参拝した。

祭員は関東教区各主会青年部員、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は柴原新一郎茨城主会青年部員、添釜は神奈川主会のみなさんが担当した。

祭典では、斎主が東光苑月次祭祝詞の中で、来年一月の「出口王仁三郎とその一門の作品展」開催を奉告。盛会と成功を祈願した。

心を一つにして祭典にお支えした青年部員たち

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長があいさつに立ち、去る十一月二十一日に天恩郷で開催された「世界平和祈願祭」の様子などを報告したほか、開教百二十年まで取り組まれた「みろくの世特別宣教」を振り返りながら、来年度の教団方針の一説を紹介。『大本のみろくの教えを、外に広く、内に深く宣べ伝える』を実践すべく、来年一月の『出口王仁三郎とその一門の作品展』を機に有縁の方々を神の門戸に至るまでお世話いただきたい」と力説した。

出口なお・出口王仁三郎の世界を語る

第百十八回大本公開講座『出口なお・出口王仁三郎の世界を語る』は、十二月十九日午後七時から八時三十分まで、港区新橋の航空会館において、浅田秋彦東京宣教センター長を講師に「今を幸せに生きる―運を開く五つの鍵―」と題して開催された。参加者は二十二人（内、一般七人）。

講座では、人間の幸福の度合い、神と人との関係、運命と宿命の違い、人生の目的などについて解説したほか、生活実践の原理である大本四大主義の教えと祈ることの大切さを具体的に説いた。「生命の根源に心を向けて真剣に祈り、そして清潔・楽天・進展・統一の四大主義を実践していくことで、心身により良い生活が送ることができる」と結んだ。

参加者からは、「いい運命を引き寄せる生き方のヒントをいただき、日々の生活を見直す正しい視点を得た思いです（七十六歳・男性・一般）」などの声が寄せられた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【訂正とお詫び】先月号の付録「平成25年度大本東京本部・東京宣教センター「東光苑」祭典行事予定表」で、8月の大本公開講座の開催日に誤りがございました。正しくは8月21日になります。訂正して謹んでお詫び申し上げます。

大本公開講座「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」常設対外講座「講話」と「実習」の開催について

大本東京本部・東京宣教センターでは、首都圏の対外宣教活動および愛善運動を積極的に推進し教勢を拡大することを目的として、昨年に続き「大本公開講座」と「常設対外講座（講話と実習）」を開催します。有縁の友人・知人へのご案内をお願い致します。

記

◎大本公開講座「出口なお・王仁三郎の世界を語る２０１３」

開催日時　毎月第３水曜日　午後７時～８時３０分
場　所　航空会館（港区新橋１丁目１８−１）
参加費　１，０００円

今年も開催決定

◎常設対外講座「講話」と「実習」

開催曜日　毎週：月・水・金曜日　参加費　無料
午後の部「講話」２時～３時３０分
夜間の部「自習」７時～８時３０分
※ただし、毎月第３水曜日の「夜間の部」は休講
期　間　平成２５年１月１４日（月）から１２月２３日（月）まで
場　所　８階ミーティングルーム（講話）、３階ご神前（実習）
内　容　〇講話：月曜日『人生の目的』
水曜日『人生を豊かに生きるために』
金曜日『あの世を知ってこの世を生きる』
〇実習：拝読会・輪読会・鎮魂・浄写など（各曜日共通）

東光苑祭典・行事予定

平成25年1月

1日（火）午前7時00分執行
新年祭
1日（火）～3日（木）
年賀
6日（日）～12日（土）
古今独歩　出口王仁三郎とその一門の作品展　魂の煌めき～耀盌と書～
会場　北とぴあ（北区王子1−11−1）
13日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・成人式式典
16日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」
講題　大本の神示と世界の将来
―人類の予言と警告―
講師　出口眞人（大道場講師）
19日（土）
聖師毎年祭（65年）

2月

3日（日）午後6時30分執行
節分大祭遥拝祭　二代教主・四代教主聖誕祭
10日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・豊年祈願祭・市杵島姫命例祭
20日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」
講題　立替え立直しの仕組
講師　森良秀（東京宣教センター次長）
23日（土）24日（日）
教本3級認定講習会